

私のスウェーデン留学について

1. 概要

- ・学部/研究科：理学部理学科 数学・数理情報コース
- ・学年：4年生
- ・留学国名：スウェーデン
- ・留学期間：2022年8月18日～2023年1月29日
- ・実施年月：2022年8月～2023年1月

2. 留学をしようと思った理由

留学を決意した理由は大きく三つあります。一つ目は、将来のキャリアをヨーロッパで積みたいと考えていたからです。スウェーデンへの留学を通して、英語力を高めながら、どのようなキャリアの方法が存在し、自分が将来のために何をすべきか明確にすることを目標に、留学を決意しました。

二つ目はスウェーデンに住むことを通して、広い世界を知りたかったためです。私が留学したウプサラ大学には、毎年たくさんの留学生が学びに来ており、スウェーデン人だけでなく、世界中の大学生と知り合えることに魅力を感じていました。多様な文化背景を持つ人々と意思疎通する中で、自分の考えを柔軟にし、感受性を高めたいと考えていました。

三つ目は少し消極的な理由ですが、愛媛に住み続けることに居心地の悪さを感じ始めたことがあります。愛媛にはいい温泉や豊かな自然、美味しいご飯がたくさんあって、優しい人もたくさんいますし、私の場合は差別を受けて苦しむことは全くありませんでした。それでも周囲との価値観のずれからなのか、自分だけ「特別扱い」されているような疎外感を感じる事が多く、それに悩むことが多くありました。結論として、日本の雰囲気が合わないのではないかと思うようになり、それが海外まで出ていくという大きな動機を形作りました。それに加えて、身内の不幸が重なったこともあり、誰かに依存しない強い生きがいを見出すことを切望していたことも、日本の外に出てみたいと感じる遠因になったように思います。

3. その大学を選んだ理由

理由の一つに、ウプサラ大学の歴史がとても長いことがあります。ウプサラ大学の創立は1477年で、北欧圏では最古の大学にあたります。日本の大学では考えられない長さの歴史を持つ大学で学ぶことで、自分が何を感じるのかということに興味がありました。また、ウプサラ大学は学術的な評価も高く、研究の最前線で活躍する人々や、その場で学ぶ同世代の友人とコミュニケーションすることにも強い関心がありました。

また、ウプサラ大学には”Nation”という、いわゆる学生団体のようなものがあり、そこで学生生活を送ることに楽しみがありました。これは人の集まりで構成されるような単なる団体ではなく、各 Nation がそれぞれ大きな建物(13ヶ所あります)を持っており、そこでいろいろなイベントやランチ、パブなどを経営しています。カフェやレストラン、ナイトクラブを経営している Nation もあります。スポーツや音楽をする集まりも Nation の中にはたくさんあるので、そこに所属することもできます。日本含め他の国の大学にはないシステムなので、そこで留学生生活を謳歌できることがウプサラ大学の魅力の一つだと思います。

最後に、ウプサラという街に惹かれたことも理由の一つです。ウプサラ大聖堂やウプサラ城などの歴史的建造物に囲まれて留学生活を送ることに憧れがありました。またウプサラはストックホルムの隣の県ということもあり、週末に日帰りでお出かけすることができることも、楽しみの一つでした。実際に、留学中にはストックホルムに数え切れないくらい何度も行ったので、ストックホルムが第二の留学の舞台になったといっても過言ではないかと思えます。



ウプサラ大聖堂

4. 留学先で学んだこと

たくさんありますが、一般的な期待に沿う形で、まずは英語について書かないといけません。

スウェーデンでは主として英語を使って生活しました(スウェーデンの公用語はスウェーデン語ですが、スウェーデン人は英語を流暢に話せます)。友人とも英語を使

ってコミュニケーションを取り、授業も英語を使って受講しました。当然のことですが、日本にいた時よりも英語を使う(使わないといけない)機会が圧倒的に多く、生活を通して英語力を高めることができました。特に座学では得られにくいスラングやネイティブの言い回しを知れたことはとてもよかったです。またウプサラ大学には世界中から留学生が集うこともあり、英語のアクセントや発音も母語によって異なるので、多様な英語のアクセントや発音に触れることができ、とても面白かったことを記憶しています。

そして、英語を通して数学を学びました。数学の授業としては”Fourier Analysis”を履修しました。一般的な数学の授業は講義と筆記試験のみで構成され、試験に合格すると単位が取れる仕組みですが、”Fourier Analysis”は講義と問題演習の時間で構成されており、試験も筆記だけでなくプレゼンテーションが必須となっていたので、プレゼンテーションの準備を通して、数学科の他の友人と仲良くなることができました。

また、授業と並行してウプサラで卒業研究も行っていました。初めの方は教授との議論がままならない中、自分は何をしていいのか分からず苦悩することもありましたが、議論を重ねる中で、自分が研究としてやりたいこと、その達成のために具体的にすべきことが見えてくるようになり、最終的にはどのように数学を研究すべきかを学ぶことができました。今後数年の内に欧州でのキャリア形成を始めたいと思う私にとっては、大変貴重な学びができたと思います。



数学科のあるキャンパス (Ångströmlaboratory)

次に、文化の側面から学んだことを述べたいと思います。海外留学によって達成できること、その大きな一つは異文化理解だと思っています。留学中にスウェーデン人や留学生と一緒に過ごす時間はとても長く、その中でお互いの言動の特徴や価値観の違いに刺激を受けながら、お互いの国の生活や文化についてよく話し合っていました。そこでカルチャーショックを受けることもしばしばありました。

具体的な例を一つ挙げると、ベジタリアンやヴィーガンの人々が日本と比べてとても多いことが挙げられます。日本と同様に、スウェーデンにもいろいろなレストランがありますが、そのどれもがベジタリアンやヴィーガン向けのメニューを持つ

ていますし、スーパーマーケットに行けば彼らでも食べられる食品は容易に手に入ります。またスウェーデンには、宗教上や健康上の理由というよりは、環境保護や動物愛護の観点から菜食主義になったという人が多かったように思います。日本ではそのような観点で食事スタイルを考えたことが一度もなかったのも、彼らの視点から日本や他国の食文化を考えることはとても新鮮で、多様な食文化に興味を持つきっかけになりました。

そのほかにも、コミュニケーションの取り方(握手やハグをよくする)やファッション(ブルーデニムの人意外に多い)、交通ルール(車は歩行者のために停まるのが普通)の違いなど、留学を通して学んだことは枚挙にいとまがありません。ただ一つ、ここではっきり言わないといけないことは、これらの全てが Upsala に半年近く住んだからこそ、身をもって知り得ることができたということです。

5. 留学先で辛かったこと

辛かったことは大きく二つありました。一つ目は Upsala における秋冬の夜の長さです。10月中旬ごろまでは Upsala の昼間は10時間以上あるので、夜の長さが気になることは特にありませんでしたが、11月に入ると昼がさらに短くなる上、曇りの日がとても増えるので、相対的に太陽を目にかかれる時間が急激に短くなりました。そのため、生活リズムが乱れがちになったり、うつ気味になって勉強等へのやる気がなくなったりしました。でもそんな時に、私の友人や先生が親身になって相談に乗ってくれたので、大変な時期をなんとか乗り越えることができました。精神的には辛い時期でしたが、人々の優しさに心温まる日々だったように思います。その上、雪景色が見られるのも太陽が恋しくなる頃なので、憂鬱な気分の真只中だったとはいえ、松山では見られない美しい雪景色に囲まれて生活できたことは本当に幸せだったと思います。

二つ目は、Upsala をいずれは離れる運命に向き合わないといけなかったことです。留学前に想定していたよりも、Upsala での生活がはるかに楽しく、充実したものであったので、帰国の時期が近づくにつれて、寂しさが募っていきました。Upsala 大学や Upsala の街、そしてそこで出会った友人に別れを告げなければいけなかったからです。12月以降になると、訳もなく寂しくなって泣いてしまうこともしばしばありました。避けられない運命に向き合うことは辛かったですが、この忘れられない気持ち、恋しさが、もう一度留学のために努力する原動力になると私は考えています。

6. 留学先で楽しかったこと

書ききれないくらいありますが、その一つが友人と過ごした時間です。前述した通り、留学中はスウェーデン人や他国からの留学生(私の場合は主にドイツ人)と過ごす時間が長く、一緒にご飯に行ったり、買い物や旅行、時にはデートに行ったりしました。その時間を通して、英語で会話をしながら、日本の中や日本人との間ではできないような経験ができました。留學生活を謳歌すると共に、自分が英語を話すことの意味や海外に住むことの意義を、はっきりと実感することができたと思います。また、他大学からウプサラに来ていた日本人と話すこともあり、そこで他愛ない会話や悩み事の相談をしたことも思い出になっています。

もう一つが合唱団で過ごした時間です。私の所属した Nation には混声合唱団があります。私はそこに9月下旬ごろから入団し、毎週火曜日に合唱を楽しんでいました。歌う曲や活動の雰囲気も日本のそれとは異なり、火曜日に合唱ができることが毎週とても楽しみでした。団員は私以外みんなスウェーデン人で、最初は受け入れてもらえるか不安でしたが、みんなが "Welcome!" と言って歓迎してくれて、本当に嬉しかったことを記憶しています。練習が終わった後は、パブでビールを飲むのが恒例となっていたので、行ける時に合唱団のみんなとパブに行って、お酒とともに他愛ない会話をしたこと、それもかけがえのない思い出となっています。

最後に一つだけ書くとすれば、ウプサラでの生活そのものです。街や建物の雰囲気や人々、あらゆるものや食べ物まで、目に映るもの、聞こえてくるもの、感じるものの全てが新鮮で、それに囲まれて過ごす日々はとても楽しく、美しいものでした。大変なことや辛いこともありましたが、今まで知り得なかった稀有な感情を持ち、優しい人々に囲まれて留學生活を送ったこと、総合するとそれがこの留學で本当に楽しかったことだと言えらると思います。

7. 海外留學を考えている方へ

海外留學は楽しいことだけでなく、大変なことや辛いこともあるかと思いますが、日本にいるだけではできない貴重な経験がたくさんできることは間違いないと思います。一人でも多くの方が海外に留學でき、勉強したり遊んだりしながら、たくさんの方のことを海外で学べることを切に願っています。